HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宣傳に就ての一考察 ： 犯罪心理學の立場より見たる
Author(s)	佐藤, 昌彦
Description	研究
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 6, 63-74
Issue Date	1938-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10652
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p63-74.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

宣傳に就ての一考察

——犯罪心理學の立場より見たる——

佐藤昌彦

一、宣傳と犯罪心理學
二、恐怖の本體
三、恐怖と宣傳

一

宣傳に關する論議は、今次の支那事變を契機として、盛んに行はれつゝある。その中、先づ政治學者の側からなされたものに、注目に値するものがあるのは、當然と言はなければならない。政治の本質は、或る多數人、或ひは特定人を、自己の欲する方向に動かすに存するのであるから、政治の實際に於て、宣傳の荷ふ役割の大なるものがあるのは、當然と言ふべく、從つて、夫に關する重要な論議の行はるべきは勿論である。又見方をかへれば、かく多數の人々が、或る一つの方向に動かされると言ふ事は、一つの重大な社會現象であるから、之に就ては政治學者以外に、社會學者の側からも、諸種の提言、論究がなさるべきは明かである。更に又、かゝる學者の

側のみでなく、廣く文化現象に興味を持つ人々や、或ひは又、文學者、音樂家等がその實際の宣傳工作に占める重要な地位から、宣傳に就て、諸種の發言をなすのは、あるべき事であり、又その中には技術的に見て重要なものが存するのは當然である。

自分は政治學者でなく、又社會學者でもなく、更に又宣傳の實際にあたる者でもないが、犯罪心理學を研究するもの丶立場から、宣傳に就て、一の考察を下してみやうと考へるのである。

犯罪心理學より見たる宣傳。之は一見如何にも奇矯の言の如くである。然し事實は決して然らざる事を、自分は次に、之等兩者間の關係に關する疑問三をとりあげ、之を解明する事によつて、說明したいと考へる。

第一の疑問は、犯罪心理學の目的と、宣傳との關係に就て發せられる所のものである。犯罪心理學の目的に就ては、學者に依つて、夫々の見解がとられ得るであらうが、自分は之を次の如くに解して居る。即ち、人の行動を惹起せしめた心理的重要性の探求が、犯罪心理學の目的であると。人の取る各種の行動、その中には、ノーマルなものもあり、又アブノーマルなものも存する。そのアブノーマルな行動の一種が犯罪行爲なのであるが、斯るアブノーマルな行動が、如何なる心理的原因から發生したかを、探求するのが、犯罪心理學の目的なのである。人の行動の大部分の原因は、心理的實在に存する。此の心理的實在或は心理的重要性を、今私は動機或は原動力と名付ける。此の動機の如何なるものが、人をして犯罪行爲に至らしむるものであるかを、犯罪心理學は探求する任務を有して居るのである。若し此の事が成就せられたならば、かゝる動機の持つ力が明かにせられた事となる。例を殺人行爲にとれば、殺人行爲の如き重大なる行動を敢てせしむる程の動機は如何なるものであるかを、闡明する事を得たならば、夫によつて、その動機の持つ力、即ち行動に對する影響力は或る程度迄明かにせられるわけである。從つて、宣傳に就て考察する場合も、此の方式をそのまゝ適用する事を得るかの如くに考へられる。然し、若しかゝる動機が、特定の犯罪者、或は廣く犯罪者に、特有のものであるならば、夫は一般人と

は何等の關係が存しないのがあるから、恐らくは犯罪者以外の一般人を對象とする宣傳を論議する場合には、夫は何等の役割を果し得ないではないかとの疑問が、先づ生じて來るのは當然であらう。然し、今日迄に犯罪心理學の得た成果に依れば、犯罪者の心理的特性と普通人の夫との間には、本質的には何等の差異が存しない事となつて居る。精神病學に於ても、クレツチユメルの研究に依れば、精神病者に於て見られる心理的特質は、そのまゝ程度を低めて、普通人に於て見出されると言ふのであるが、同樣に犯罪者の心理特質と普通人の夫との差異は只程度の差に止まるのである。勿論、犯罪行爲に導く程、強大な程度であると言ふ事は、當然普通人との差異として見るべき事であるが、夫はその心理的特性の有する力或は働きを、考察する場合には、考慮するを要しない事と言はなければならぬ。從つて、犯罪行爲を導き出す程強大な働きを有する心理的特性——夫は普通人にもその程度に迄は到らずに存在するもの——の探求が成功するならば、その心理的特性の働きは又一般人にあてはめて一向差支へがない事となるのである。此處に、アブノーマルな行動の心理的原因が、一般行爲の心理的原因として考へ得る理論的根據を見出し得るのである。之に基いて犯罪心理學の研究の成果を宣傳と言ふ如き一般的な場合に擴張して行き得るのである。

第二の、犯罪心理學と宣傳との關係に關する疑問は次の如くにして起される。即ち、普通人にも犯罪者と同樣な心理的素質が存在するものとしても、かゝる心理的重要性即ち動機の行爲に對する決定力は、犯罪者の行爲から、推定せられるものであるから、夫は結局、犯罪者なるが故に生じた結果を一般の場合にあてはめる事となるのであつて、かゝる事は許さるべきではない、と言ふのが之である。此の論難に對しては二つの部分に分つて答へるのが便宜である。第一の部分は要約すれば、或る一の原因があたへられても、その結果は必ずしも同一でないと言ふ事である。假りに疾病を惹起し得る程重大な原因が人にあたへられたとしても、夫は必ずしもすべての場合に、疾病を惹起するものとは限らない。その何れであるかは、結局、個人差の問題となるのであつて、その個

人差そのものこそ犯罪心理學の探求すべき事に屬するかの如く考へられ得る。然し、犯罪心理學に關する限り、此の個人差或は個人の特性とは、强力な動機が先天的か或は他の原因に依つて與へられて居ると言ふ事であつて與へられた强力な動機が如何に作用し得るかと言ふ事ではないのである。從つて、犯罪心理學は、或る强力な動機が犯罪者には與へられて居ると言ふ事實を明かにすれば足りるのであつて、その强力な動機なるものは、一旦存在すれば當然他のファクターを壓伏して作用し得るものである事は犯罪者と否とを問はないのである。

此の結論は實は犯罪必至論に導くものであるから、甚だ嫌忌すべきものゝ如く思はれるかも知れない。然し、或る一定の原因が與へられたならば、必ず犯罪に導くべき事を證明するのが、科學としての犯罪心理學の有する使命であるから、その必至の原因に就て、未だ探求が至らないのは止むを得ない事としても、必至論そのものを非難する事は、實は科學としての犯罪心理學の成立を否認する事であるから、之は容易に受容するを得ないのである。

個人性に關する論難に對する解明は上述を以てつくされたと考へるが、次に非難の第二の部分が來る。即ち犯罪者に於て見出した結果を普通人に擴張する理由は何處にあるかと言ふのが夫である。之は後述する所から明かになると考へるのであるが、重大な心理的特性は必ず或る行爲に人を導くものである。犯罪者の場合の如く、夫が極めて强力である場合には、當然、犯罪行爲に導くのであるが、然らざる場合に於ても、夫が或程度の力に達すれば當然或る結果に導くものなのである。只その動くべき線が、犯罪者の場合にあつては、擴大されて見出されるのにすぎないのである。從つてその擴大された線をトレースする事に依つて、當然一般の場合も之を知り得るのである。故に之は別に類推或は擴張と呼ばるべき性質のものではなく、同一物に就ての觀察に外ならないのであつて、只その線を明瞭にし得る場合と然らざる場合とが存するにすぎないのである。

最後に、自分の言ふ犯罪心理は、個人的な心理を指して居るのであるから、その個人的な研究の成果を、宣傳

の效果と言ふ如き、いはゞ集團的な心理に適用し得るかの疑問が生ずるであらう。之を第三の疑問として答へる事としやう。一體集團心理なるものは如何なる性質を有するものであらうか。集團心理も要するに個人の心理が其の基礎となつて居るのではあるまいか。個人自身の心理を離れて何處に集團自身の心理が存在し得るであらうか。勿論かく言ふ意味は、集團が集團自身のものと見るべき心理的特性を有する事を否定するのではなく、かゝる特性も究極の所、個人の心理に還元する事を得るのではないかと言ふのである。即ち集團が全體として一の心理的動きを有する場合も、その集團を構成する各個人が夫々その方向への心理を有するが故である。勿論その動きは集團中にあるが故に生じたものではあるが、個人心理の存在は動かすべからざる事實と言はなければならぬ。從つて集團を構成する各個人を動かす心理的重要性を知る事を得れば、夫れは究極の所、集團全體を動かす動機を知り得た事となるのである。

若し又此の點に關する非難の意味が、自分の言ふ犯罪心理は、特定人の夫れであつて、その方式が一般に適用せらるべきものではないと言ふのであれば、夫は正に、自分の意圖し又犯罪心理學が今日迄に得た所が充分でない事に對する非難であると言はなければならない。勿論、犯罪心理學は、各個の現象を解明し、且つ夫れから生ずる方式が一般的に妥當する事を證明せんと努力しつゝあるのである。只研究が充分にその成果をあぐるに至つて居ない事は、犯罪心理學が成立後漸く百年を經た若い科學である事によつて、之を許し、更に努力と試みがなされつゝある事を認めてもらふより致し方のない事である。

二

以上一に於て述べた所に依つて、犯罪心理學の成果、即ち人の行爲の動機の探求の結果を、宣傳と言ふ如き一般の場合にあてはめて考察する事は、許さるべき試みである事が明かとなつたと考へる。勿論、今日の犯罪心理學に於て行動の動機として考へて居る所のものは決して簡單なものではなく、又その種類も一二に迄まるもので

はない。そのすべてをあげて詳述する事はもとより望ましい事であるが、自分は玆では、一の動機のみをとりあげて考察してみやうと考へるのである。その一の動機とは即ち恐怖である。

恐怖とは何か。少しく恐怖の本體を解剖してみやう。恐怖とは或る事物の本體が不可解であり、而もその不可解と言ふ事と威力とが結合して居る場合に、之に對する者に生ずる心理的狀態である。結局、恐怖の本體は不可解と言ふ事に存するのであるが、而も夫れは威力を內に藏する不可解でなければならないのである。即ちその本體を知る事を得ず、而も威力のみが認識せられる場合に生ずるのが恐怖心である。その威力は、本體が不可解であるが故に、何時、如何なる場合に、如何なる方向へ發現するかは一切不明なのである、從つて、之に對しては策の施し樣のない所に、恐怖の本體が存するのである。かゝる恐怖は、その事物の本體が明瞭となるに從つて、漸次に薄くなり、その威力の性質を明かにする事を得れば、遂に消滅するに至るのである。最も簡單な例として電光及び雷鳴に對して人の抱く恐怖に就て考察してみやう。原始人、未開人、或は小兒は電光及び雷鳴に對しては、深甚な恐怖の念を抱く事は周知の如くである。之はその本體を知る事を得ず、その威力のみを感ずるが故である。然し、次第に智識が進歩すれば、かゝる現象は、電氣現象として、科學の範疇內に屬するものである事を知り、その性質が次第に明かとなると共に、之に對する恐怖は薄らぐのである。若し成年以上の者であつて、尙電光や雷鳴に對して、小兒同樣の恐怖心を抱くものがあるとすれば、夫れは例外に屬するものと言ふべく、異常現象として特に考究に値する事であらう。現代に於ては、成人の大部分は此の種の現象に對しては左程大なる恐怖心を抱かないのが普通である。勿論、多少の恐怖心は尙成年者に於ても殘存する事を見るのであるが、之はその智識の程度が充分でなく、假令、電氣現象である事は知つて居ても、その詳細に就て智識を缺くが故である。之に反し、電氣現象に就て充分の智識を有するものであれば、斯る恐怖心の大部分は消滅し、特に斯る現象を研究する者にあつては、電光雷鳴に對しては寧ろ興味と喜びを感ずる事が多いであらう。之は彼の知悉した現象の

再現は彼の智識を確實ならしめ自己に關する優越感をもたらすが故である。

恐怖の本體は上述の如きものであるが、次にかゝる恐怖から人の如何なる行動が導き出されるかを考へてみやう。

恐怖から生ずる行動として第一に考ふべきものは夫れからの逃避である。不可解な威力あるものに對した時に第一に生ずる念はそのものから逃避せんとするにある事は、何人も首肯する所であらう。（此の逃避に就ては次に詳述する）。然し逃避があらゆる場合に可能であるわけではない。事實上の狀態が之を不可能ならしめる事があり、又何等かの心理的狀態が逃避に出づる事を拒否する事もあるのである。その何れであるとを問はず、大なる恐怖に襲はれ、而も逃避が許されない時に、とられる行動は、意外に強大な反擊行爲であるのが普通である。之は、窮鼠かへつて猫を嚙むと言ふ言葉を以て表現されるが如き行爲であつて、通常の場合には、豫想し得られない樣な強烈な行動が、恐怖をその原動力としてとられるのである。例へば、犯罪行爲に例をとれば、窃盜の常習者にあつては、兇器を携帶して他人の家屋に侵入するが如き事は殆んど見られないのである。之は彼等が、兇器が窃盜の目的を遂行する上には、殆んど何等の效果をあげ得ない事を知悉せるが故でもあり、又彼等が彼等の侵入後の狀態に就て充分の豫見を有するが故でもある。即ち彼等は之に就ては殆んど恐怖心を有せず、職業的冷靜を以て事を處理し得るが故である。然るに、一方、窃盜に就てそれほどの經驗を有しない者は、窃盜の目的でありながら兇器を携帶する事が多いのである。之は彼等が冷靜を缺き、侵入後の狀態に就ては何等の豫見もなし得ない爲に、不可解の狀態に對し、あらゆる威力を想像し、深い恐怖心に襲はれて居るが故である。從つて窃盜常習者にあつては、たとへ侵入後發見せられたとしても、之を脫出する事は容易である。何故ならば彼等は、發見者も亦、職業的な冷靜を有する者例へば警察官の如きものならざる限り、未知の侵入者に對しては深い恐怖心を有する事を知つて居り、從つて之を利用する事によつて逃走の途を見出すは容易であるからである。然るに常習

者以外の者にあつては、一旦發見せられた時は、發見者の性質に就て何等の考慮をめぐらす餘裕はなく、當然自己に對して危害を加ふる事を豫想し、それより生ずる恐怖は彼等をかつて反擊加害の態度に出でしむるのである此の態度は又、發見者の側に於ける、不可解の侵入者に對する恐怖より生ずる行動によつて一層助長せられ、結局そこに見出される事態が恐るべきものとなるのは多數の實例が示すが如くである。

以上は恐怖心の生み出す行動の一例を示したのであるが、斯の如き恐怖心を有する者に對しては、一方、示唆が強力に働きかけ得る事は注目に値する。之は恐怖心の生み出す行動自身ではないが、行動の原動力と見るべきものである。恐怖心は上述の如く、物の本體を理解し得られない所から生ずるのであるが、斯の如き者にあつては、自己以外に何等かの依據すべきものを求めるのが普通である。何等か他の强力なものに縋つて安心を求めんとするのである。例へば、原始人、未開人は信仰の對象を求め、小兒は母を求める、之等にたよる事によつて、恐怖心を忘れ去らうとするのである。之は一種の逃避であるが、威力あるもの、勢力範圍からの逃避でなく、依然として勢力範圍に止まりつゝ、而も何物かにすがつてその威力を忘れ様とするのである。かゝる依據すべきものが見出された場合には、反擊の如き行動が起り得ないのは明かであり、從つて、直接そのものに對して恐怖心自身から行動を起さしめる事はないのであるが、他のものに依據して居るが故に、その行動はそのものの示唆によつて左右せられる場合が極めて多いのである。原始人、未開人に於ける神託、小兒に於ける母の命令は、如何なる場合にも强力であるが、特に彼等が恐怖に襲はれて居る場合には、依據の念が强力である丈け、一層の力を有するのである。

次に、恐怖心を抱くものが、自身の恐怖にのみとらはれて居る場合は、逃避か反擊かの行動がとられるわけであるが、若しその恐怖が永續的のものであり、而もその者以外には恐怖心を抱くものがない事をその者が認識した場合には、恐怖は又別種の行動を起さしむるものである事を注意しなければならない。此の場合に於ける行動

は、反撃の如き反射的のものでなく、多少の時間的な餘裕を以て行はれる。夫は恐怖と行動との間に、他の種類の心理的過程が介入するからである。此の心理的過程とは即ち憎惡である。

不可解な事物に對して、深い恐怖を抱くものが、自己以外の者は、かゝる恐怖を有しない事を認識した時に、必然的に生ずるのは憎惡である。自己の能力と他人の能力との比較は、自己の無能が恐怖から生じ自己の力を以てしては如何ともすべからざるものである事を知る時に、他人及び恐怖の對象物への憎惡と變化するのである。此の憎惡の强度は、夫をもたらした恐怖の性質如何によつて異り、從つて行動への原動力となるか否かもその性質によつて定まる。簡單な一個の自然現象を理解し得ない事から生ずる如き性質のものは、極端な行動の原動力とはなり得ないであらうが、若しそのものゝ生活と至大の關係を有する事物から生じたものである時は、極端な加害行動となつて發するに至るのである。斯の如き場合にあつては、恐怖は人間行動のすべてを支配する原動力となるのである。もつとも、恐怖が憎惡を生ぜしむるのは、必ずしも上述の如き場合のみではない。假令、他者との比較が存在しない場合であつても、その恐怖を生ぜしめたものが自己と密接な關係にある場合には、そのものゝ本體を知り得ない事は自己に對し重大な利害關係があるのであるから、その恐怖は直ちに憎惡となり、而も此の兩者は、密接な關係にある丈け、恐るべき行動（主として加害行爲をその內容とする）が生ぜしめられるのである。

三

恐怖心の動機としての有力な點及びそれによつて惹起せられる行動に就て上述の如く考究して來たが、次に本題にかへつて、かゝる恐怖心と宣傳との關係に就て次に考察してみやう。

宣傳の本質は、冒頭に於て述べた如く、人をして或る種の行動を取らしめるに存する。從つて、宣傳に就て、詳細な研究を爲さんとすれば、如何なる動機が如何なる行動を惹起するかを研究するに止まらず、更に進んで、

如何なる事物が、かゝる動機を人にあたへるものであるかを探求しなければならないのである。此の後の點は至大な困難を提示する。例へば、或る一つのポスターと雖も、人の心理に及ぼす影響は、多種多様である。美麗なポスターは多くの場合、人を誘引するものであらうが、その美麗さの故に、かへつて、反感を生ずる場合があるであらう。若し、そのポスターの目的が、或物の存在を周知せしむるにあるとすれば、何れにしても効果あるものと考へ得るが、反感は當然反對運動を豫想しなければならないから、その効果に就て簡單な結論を下す事は容易になし得ないのである。ポスターの如き、單純なものにあつても、それの人に及ぼす作用は相當複雜と言はなければならないが、更に進んで、講演、文學的作品、映畵、音樂の如きものを宣傳に使用する場合にはその効果に就ては更に複雜愼重な研究が行なはれなければならない事は明かである。即ち個々の事物に就き、心理的な研究が充分に行はれなければならないのである。然し自分は玆にはかゝる種類の研究に就て發言せんとするものではない。自分がなさんとするのは、上述の如く、恐怖心の本體を明かにした事によつて、恐怖心と行動との關係から、宣傳につき四の提言を試みやうとする事である。

その第一は、宣傳の相手方に、自己に就ての恐怖心が存在する場合には、宣傳の効果は極めて減殺せられると言ふ事である。之は恐怖心は逃避か反擊かの行動に導くおそれの充分あるものであるが故である。從つてかゝる場合に於ては、宣傳の目的は先づ、斯の如き恐怖心を除去すると言ふ點に向けられなければならないのである。本來、恐怖心は本體を理解しない所から發するものであるから、先づ何等かの方法を以てその本體を知らしめるのが、恐怖を除去する第一の方法である。之は本來の宣傳を全然はなれた方法を以て行ふのが得策であらう。例へば、イタリーがエチオピアとの紛爭の場合、アメリカに於て發生したイタリーに對する反感を除去するに極めて有効な方策を取つたのである。夫は、イタリーは自國の文化、或は風景を紹介する美麗なパンフレツトを米國内の小學校に配布したのであつた。イタリーに對する反感の生じたのは、要するに、イタリーの勢力がアメリカ

を侵略しはしないか、或はイタリーの持つ無形の威力を恐怖した爲と解すべきであるから、此の恐怖心を本源とする反感を除去する爲に、イタリー自身に親しみを持たせる方策としての、文化、風景についてのパンフレットの配布は、まことに効果のあつた事と思はれるのである。

以上は、恐怖心が宣傳に對して消極的な効果を及ぼす場合に、その除去方法に就いて述べたのであるが、かゝる反對行動を利用する方策に就て考へてみやう。之が宣傳に關する自分の第二の提言である。

恐怖心からは上述の如く、逃避、反擊、或は憎惡に基く加害行動が生ずるのであるが、之等の行動は相當強力なものであるから、他者を妨害せんとする目的を有する場合には、その者について恐怖心を惹起せしむるが如き宣傳方策をとれば必ず成功するであらう。此の爲には、妨害せんとする者の本體を隱蔽し、恐るべき力を之に賦與するが如き方法を取れば良いのである。本體を知らない事から恐怖心が生ずるが故である。世界大戰中、ドイツに對する反對宣傳の多くは此の形を取つて行はれ、多數の中立國民の恐怖心を驅りたて、ドイツに對する反對行動を惹起せしめたのは周知の事實である。從つて、若しかゝる反對宣傳が巧みに行はれて居る場合には、それが事實と相反する事を追ひかけて說明するよりも、寧ろ、第一の提言の如くにして、その根源に存する恐怖心を除去すべき方策を取るべきである。即ち理解と親しみを發生せしむべき、全然獨立の方法を取る事によつて反感を消去し得るのである。

然しながら、恐怖心の存在は必ずしも本來の宣傳に對して惡影響を及ぼすものではない。恐怖心が宣傳に對しよき効果をもたらす場合の一を自分は第三の提言として次に試みやうと思ふのである。

恐怖心が反對行動を起さしむる程強力でない場合は、かつて畏敬の念を生ずるものである。之は神秘感と聯關を有するのであるが、あまりに何事も知悉して居る場合は、親しみは發生するが、畏敬の念は發生し難いのである。人間を行動に導く原動力としては理解と親愛の念も有力であるが、畏敬の念の力も無視する事を得ない。多

少の恐怖心が存在する場合には、夫は神秘感と結合して、そのものに對する積極的な有利な行動を取らしめる事があり得るのである。信仰の念が、人の行動に及ぼす力は明かであるが、信仰の念まで程度を高めなくても、恐怖心から生じた神秘感と結合した畏敬の念は、又必ず有利な行動に導く事は考へ得べき事である。從つて理解につとむる事はもとより必要であるが、多少の恐怖心を殘存せしむる事、即ちその宣傳に際して本體を或る程度迄隱蔽する事はかへつて有利な行動を惹起せしむる所以なのである。

第四に、自分は、恐怖心を有する者に對してその者が依據する者の有する示唆の力の利用につき、宣傳と聯關して提言を試みやうと思ふのである。

上述の如く、恐怖心を有する者は、何等か依據する者を求め、その者の示唆によつて、その行動が決定せられる場合が多いのである、從つて若し、宣傳の相手方が恐怖心を有するには、それを除去するのは一の方法であるが、又その者が依據する者をさがし求め、その者の有力な示唆によつて宣傳の目的を達するのが有利な場合も多いであらう。群集を說得する爲に、百の努力をなすよりも、その群集を指導する者即ち彼等が依據する者を說得して、その者から群集に働きかけしめる方が有效となすのである。之亦一の宣傳技術として考ふべき事であらう

（十三・二・八）